

大衆文学大系

尾崎紅葉

徳富蘆花

小栗風葉

泉鏡花

大衆文学大系

|| 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

7

尾崎紅葉
徳富蘆花
小栗風葉
泉鏡花

大衆文学大系 1

尾崎紅葉 徳富蘆花
小栗風葉 泉鏡花 集

昭和四十六年五月二十日 第一刷

著者 尾崎紅葉 徳富蘆花 小栗風葉 泉鏡花

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二十一 郵便番号 一一二
電話東京九四五―一二二(天代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©尾崎紅葉 徳富蘆花 小栗風葉 泉鏡花 一九七二

目次

尾崎紅葉集

金色夜叉

五

徳富蘆花集

不如歸

三九

小栗風葉集

青春

三三

泉鏡花集

婦系図

五七

照葉狂言

解 解
年 題 說
譜

三

其 其 其

其

尾
崎
紅
葉
集

金色夜叉

前編

第一章

未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて、真直に長く東より西に横われる大道は掃きけるように物の影を留めず、いと寂しくも往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の軋は、或は忙しかりし、或は飲過ぎし年賀の帰來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に尽きぬる三箇日を惜むが如く、其の哀切に小き腸は断れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を讀して、此黄昏より冴は戦出でぬ。今は「風吹くな、なあ吹くな」と優

しき声の宥むる者無きより、憤をも増したるように飾竹を吹靡けつゝ、乾びたる葉を粗なげに鳴して、吼えては走行き、狂いては引返し、揉みに揉んで独り散々に騒げり。微曇りし空は之が為に眠を覚されたる氣色にて、銀梨子地の如く無数の星を顯して、鋭く互えたる光は寒氣を發つかと想わしむるまでに、其の薄明に曝さるゝ夜の街は殆ど氷らんとすなり。人此裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、争か那の世間あり、社会あり、都あり、町あることを想得べき。九重の天、八際の地始めて渾沌の境を出でたりと雖も、万物未だ尽く化生せず、風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に溢く横われるに過ぎざる哉。日の中は宛然沸くが如く染み、謳い、酔い、戯れ、飲び、笑い、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚くも夏果てし子子の形を斂めて、今將何処に如何にして在るかを疑わざらんとするも難からずや。

多時静なりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。其響の消ゆる頃忽ち一点の燈火は見え初めしが、揺々と町の尽頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂しき星月夜を壇に吹くのみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出する湯氣は一団の白き雲を舞立てゝ、心地悪き微温の四方に溢るると共に、垢臭き惡氣の盛に迸るに遭える綱引の車あり。勢いて角より曲り來にければ、避くべき遑無くて其中を駈抜けたる。

「うむ、臭い。」

車の上に声して行過ぎし跡には、葉卷の吸殻の捨てたるが赤く見えて煙れり、

「もう湯は抜けるのかな。」

「へい、松の内は早仕舞でございます。」

車夫の慇懃な答えし後は語絶えて、車は驀直に走れり。紳士は二重外套の袖を袖と掻合せて、類の衿皮の内に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、横縞の華麗なる浮波縞の蔽膝して、提灯の徽章はTの花文字を二個組合せたるなり。行き／＼て車は此小路の尽頭を北に折れ、稍広き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、其の南側の半程に實輪と記したる軒燈を掲げて、刻竹を飾れる門構の内に挽入れたる。玄関の障子に燈影の映しながら、格子は鎖固めたるを、車夫は叩き、

「頼む、頼む。」

奥の方なる響動の劇しきに紛れて、取合わんともせざりければ、二人の車夫は声を合せて訪いつゝ、格子戸を連打にすれば、旋て急足の音立てゝ人は出で来ぬ。

円髻に結いたる四十約の小さく瘦せて色白き女の、茶微塵の糸織の小袖に黒の奉書袖の紋付の羽織着たるは、此家の内儀なるべし、彼の忙しげに格子を啓るを待ちて、紳士は優然と内に入らんとせしが、土間の一面に充満たる履物の杖を立つべき地さえあらざるに遅るを、彼は慮さず勤篤に下立ちて、此の敬うべき賓の為に辛くも一条の道を開けり。忽て紳士の脱捨てし駒下駄のみは独り障子の内に取入れられたり。

(一) の 二

實輪の奥は十畳の客間と八畳の中の間とを打抜きて、広間の十個処に真鍮の燭台を据え、五十目掛の蠟燭は沖の漁火の如く燃えたるに、間毎の天井に白銅鍍の空氣ランプを点したれば、

四辺は真昼より明に、人顔も眩きまでに耀き遍れり。三十人に余ぬる若き男女は二分に輪作りて、今を盛りと歌留多遊を為るなりけり。蠟燭の燄と炭火の熱と多人数の熱蒸と混じたる一種の温気は殆ど凝りて動かさる一間の内を、莫の煙と燈火の油煙とは互に纏れて渦巻きつゝ立迷えり。込合える人々の面は皆赤うなりて、白粉の薄剥けたるあり、髪は解れたるあり、衣の乱次く着類れたるあり。女は粧い飾りたれば、取乱したるが特に著るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで胴衣ばかりになれるあり、羽織を脱ぎて帯の解けたる尻を突出すもあり、十の指をば四まで紙にて結いたるもあり。然しも息苦しき温気も、咽ばさるゝ煙の渦も、皆狂して知らざる如く、寧ろ喜びて罵り喚く声、笑聲るゝ声、振合ひ、踏破く舞き、一斉に揚ぐる響動など、絶間無き騒動の中に狼藉として戯れ遊ぶが體は、三綱五常も糸瓜の皮と地に塗れて、唯是修羅道を打襲したるばかりなり。

海上風波の難に遭える時、若干の油を取りて航路に澆げば、浪は奇くも忽ち鎮りて、船は九死を出ずべしとよ。今此の如何とも為べからざる乱脈の座中をば、其油の勢力をもて支配せる女王あり、猛びに猛ぶ男たちの心も其人の前には和きて、終に崇拜せざるはあらず。女たちは皆猜みつゝも畏を懷けり。中の間なる團樂の柱側に座を占めて、重げに戴ける夜会結に淡紫のリボン飾して、小豆鼠の縮緬の羽織を着たるが、人の打騒ぐを興あるように涼き目を睜りて、躬は淑かに引繕える娘あり。粧飾より相貌まで水際立ちて、凡ならず媚を含めるは、色を売るものゝ仮の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見るものは皆疑えり。一番の勝負の果てぬ間に、宮という名は普く知られ

ぬ。娘も数多居たり。醜きは、子守の借着したるか、茶番の姫君の戸惑せるかと覺しきもあれど、中には二十人並、五十人並優れたるもありき。服装は宮より数等立派なるは数多あり。彼は其点にては中の位に過ぎず。貴族院議員の愛娘とて、最も不器量を極めて遺憾なしと見えたるが、最も綺羅を飾りて、其起肩に紋御召の三枚襲を被ぎて、帯は紫根の七糸に百合の折枝を鍔金の盛上にしたる、人々之が為に目も眩れ、心も消えて眉を皺めぬ。此外種々色々の絢爛なる中に立交らいては、宮の装は纔に曉の星の光を保つに過ぎざれども、彼の色の白さは如何なる美しき染色をも奪いて、彼の整える面は如何なる麗わしき織物よりも文章ありて、醜き人たちは如何に着飾らんと其の醜きを蔽う能わざるが如く、彼は如何に飾らざるも其の美しきを害せざるなり。

袋棚と障子との片隅に手炉を囲みて、蜜柑を剥きつゝ語う男の一個は、彼の横顔を恍惚と遙に見入たりしが、遂に思堪えざらんように呻き出せり。

「好い、好い、全く好い！ 馬士にも衣裳と謂うけれど、美しいのは衣裳には及ばんね。物其自らが美しいのだもの、着物などは如何でも可い、実は何も着て居らんでも可い。」

「裸体なら猶結構だ！」

此の強き合槌撃つは、美術学校の学生なり。

網曳にて駆着けし紳士は姑く休息の後内儀に導かれて入来りつ。其後には、今まで居間に着みたりし主の箕輪亮輔も附添いたり。席上は入乱れて、爰を先途と激しき勝負の最中なれば、彼等の来れるに心着きしは稀なりけれど、片隅に物語れる二人は逸早く目を側めて紳士の風采を視たり。広間の燈影は入口に

立てる三人の姿を鮮かに照せり。色白の小さき内儀の口は柑の為に引歪みて、其夫の額際より緒禿げたる頭顱は滑かに光れり。妻は尋常より小きに、夫は勝れたる大兵肥満にて、彼の常に心遣ありげの面色なるに引替えて、生きながら布袋を見る如き福相したり。

紳士は年齒二十六七なるべく、長高く、好き程に肥えて、色は玉のようなるに頬の辺には薄紅を帯びて、額厚く、口大きく、腮は左右に蔓りて、面積の広き顔は稍正方形を成せり。緩く波打てる髪を左の小鬢より一文字に撫付けて、少しは油を塗りたり。濃からぬ口髭を生して、小からぬ鼻に金縁の目鏡を挟み、五紋の黒塩瀬の羽織に華紋織の小袖を裾長に着做したるが、六寸の七糸帯に金鏈子を垂れつゝ、大様に面を挙げて座中を陶したる容は、実に光を発つらんように四辺を払いて見えぬ。此団欒の中に彼の如く色白く、身奇麗に、而も美々しく装いたるはあらざるなり。

「何だ、彼は？」

例の二人の一個は然も憎さげに呟けり。

「可厭な奴！」

唾吐くように言いて学生は故と面を背けつ。

「お俊や、一寸」と内儀は群衆の中より其娘を手招きぬ。

お俊は両親の紳士を伴えるを見るより、慌忙しく起ちて来れるが、顔好くはあらねど愛嬌深く、いと善く父に肖たり。高島田に結いて、肉色縮緬の羽織に撮みたるほどの肩揚したり。顔を根めつゝ紳士の前に跪きて、慇懃に頭を低れば、彼は纔に小腰を屈めしのみ。

「どうぞ此方へ。」

娘は案内せんと待構えけれど、紳士は然して好ましからぬように領けり。母は歪める口を怪しげに動かして、

「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴きだよ。」

お俊は再び頭を低げぬ。紳士は笑を含みて目礼せり。

「さあ、まあ、被入いまし。」

主の勧むる傍より、妻はお俊を促して、お俊は紳士を案内して、客間の床柱の前なる火鉢在る方に伴れぬ。妻は其処まで介添に附きたり。二人は家内の紳士を遇うことの極めて鄭重なるを訝りて、彼の行くより坐るまで一挙一動も見脱さざりけり。

其の行く時彼の姿は恰も左の半面を見せて、団欒の間を過ぎたりしが、無名指に輝ける物の凡ならず強き光は燈火に照添いて、殆ど正しく見る能わざるまでに眼を射られたるに呆れ惑えり。天上の最も明なる星は我手に在りと言わまほしげに、紳士は彼等の未だ曾て見ざりし大さの金剛石を飾れる黄金の指環を穿めたるなり。お俊は骨牌の席に復えると伴しく、密に隣の娘の膝を衝きて口早に呟きぬ。彼は忙しく顔を擡げて紳士の方を見たりしが、其人よりは其指に耀く物の異常なるに駭かされたる体にて、

「まあ、那の指環は！一寸、金剛石？」

「然うよ。」

「大きいのねえ。」

「三百円だって。」

お俊の説明を聞きて彼は漫に身毛の弥立つを覚えつゝ、

「まあ！好いのねえ。」

鯛の目ほどの真珠を附けたる指環をだに、此幾歳か念懸くれども未だ容易に許されざる娘の胸は、忽ち或事を思い浮べて攻

鼓の如く轟けり。彼は惘然として殆ど我を失える間に、電光の如く隣より伸来れる猿臂は鼻の前なる一枚の骨牌を引攪え、

「あら、貴方如何したのよ。」

お俊は苛立ちて彼の横膝を続けさまに拊きぬ。

「可くつてよ、可くつてよ、以来もう可くつてよ。」

彼は始めて空想の夢を覺して、及ばざる身の分を諦めたりけれども、一旦金剛石の強き光に焼かれたる心は幾分の知覚を失いけんようにて、然しも目覺しかりける手腕の程も見ろく漸く四途乱になりて、彼は敢無くも此時よりお俊の為に頼み難き味方となれり。

恚して彼より此に伝え、甲より乙に通じて、

「金剛石！」

「うむ、金剛石だ。」

「金剛石??」

「成程金剛石！」

「まあ、金剛石よ。」

「那が金剛石？」

「見給え、金剛石。」

「あら、まあ金剛石??」

「可憐い金剛石。」

「可憐い光るのね、金剛石。」

「三百円の金剛石。」

瞬く間に三十余人は相呼び相応じて紳士の富を謳えり。

彼は人々の更互におのれの方を眺むるを見て、其手に形好く葉巻を持たせて、右手を袖口に差入れ、少し擧げに床柱に靠れて、目鏡の下より下界を見廻すらんように目配して居たり。

恠る目印ある人の名は誰しも問わであるべきにあらず、洩れしはお俊の口よりなるべし。彼は富山唯繼とて、一代分限ながら下谷区に聞ゆる資産家の家督なり。同じ区なる富山銀行は其父の私設する所にして、市會議員の中にも富山重平の名は見出さるべし。

宮の名の男の方に持囃さるゝ如く、富山と知れたる彼の名は直に女の口々に誦ぜられぬ。あわれ一度は此紳士と組み、世に愛たき宝石に咫尺するの榮を得ばや、と彼等の心々に冀わざるは希なりき。人若し彼に咫尺するの榮を得ば、啻に其目の類無く榮さるゝのみならず、其の鼻までも蓮花の多く艷くべからざる異香に薰ぜらるゝの幸を受くべきなり。

男たちは自から荒められて、女の挙りて金剛石に心奪さるゝ気色なるを、或は妬く、或は浅ましく、多少の興を冷さざるゝあらざりけり。独り宮のみは騒げる体も無くて、其の清しき眼色は然しもの金剛石と光を爭わんように、用意深く、心様も幽しく振舞えるを、崇拜者は益々懼びて、我等の慕い参らする効はあるよ、偏に此君を奉じて孤忠を全うし、美と富との勝負を唯一戦に決して、紳士の憎き面の皮を引剥かん、と手薬煉引いて待ちかけたり。然れば宮と富山との勢は恰も日月を並懸けたるようなり。宮は誰と組み、富山は誰と組むらんとは、人々の最も懸念する所なりけるが、圖の結果は驚くべき予想外にて、目指されし紳士と美人とは他の三人と与に一組になりぬ。始め二つに輪作りし人数は此時合併して一の大なる団圓に成されたるなり。而も富山と宮とは隣合に坐りければ、夜と昼との一時に來にけんように皆狼狽騒ぎ、忽ち其隣に自ら社会党と稱する一組を出せり。彼等の主義は不平にして、其目的は破壊なり。

則ち彼等は専ら腕力を用いて或組の果報と安寧とを妨害せんと為るなり。又其前面には一人の女に内を守らしめて、屈竟の男四人左右に遠征軍を組織し、左翼を狼藉組と稱し、右翼を蹂躪隊と稱するも、実は金剛石の鼻柱を挫かんと大童になれるに外ならざるなり。果せる哉、件の組は此勝負に薙ぎ大敗を取りて、人も無げなる紳士も有繋に鼻白み、美しき人は顔を赧めて、座にも堪うべからざるばかりの面皮を欠されたり。此の一番にて紳士の姿は不知見えたりぬ。男たちは万歳を唱えけれども、女の中には掌の玉を失える心地したるも多かりき。散散に破壊され、狼藉され、蹂躪されし富山は、余りに這文明的ならざる遊戲に怖をなして、密に主の居間に逃帰れるなりけり。

鬘を被たるように梳りたりし彼の髪は棕櫚蒂の如く乱れて、環の隻、挽げたる羽織の紐は、手長猿の月を捉えんとする状して揺曳と垂れり。主は見るより然も慌てたる顔して、「どう遊ばしました。おゝ、お手から血が出て居ります。」

彼は矢庭に煙管を捨てゝ、忽ちすべからざらんように急遽と身を起せり。

「あゝ、酷い目に遭った。どうも那樣亂暴じゃ為様が無い、火事装束でも出掛けなくっちゃ迎も立切れないよ。馬鹿にしている、頭を二つばかり撲れた。」

手の甲の血を吮い、富山は不快なる面色して設の席に着きぬ。予て用意したれば、海老茶の紋縮緬の裾の傍に七宝燒の小判形の大手炉を置きて、蔣絵の吸物膳をさえ据えたるなり。主は手を打鳴して婢を呼び、大急に鉢子と料理とを誂えて、「それは如何も飛でもない事を。外に何処もお怪我はございません。」

せんでしたか。」

「那樣に有られて耐るものかね。」
 為う事無さに主も苦笑せり。

「唯今絆創膏を差上げます。何しろ皆書生でございますから随分乱暴でございましょう。故々御招申しまして甚だ恐入りました。もう彼地へは御出陣にならんが宜うございます。何もございませぬが此で何卒御寛り。」

「所が最一遍行つて見ようかとも思うの。」

「へえ、又被入いますか。」

物は言わで打笑める富山の腮は愈展れり。早くも其意を得てや破顔せる主の目は、薄の切疵の如く幾と有か無かになりぬ。

「では御意に召したのが、へえ?」

富山は益々笑を湛えたり。

「ございましたらう、然うでございましょうとも。」

「何故な。」

「何故も無いものでございます。十目の見る所じやございませんか。」

富山は頷きつゝ、

「然うだらうね。」

「彼は宜うございましょう。」

「一寸好いね。」

「まず其の御意でお熱い所をお一盞。不満家の貴方が一寸好いと有仰る位では、余程尤物と思わなければなりません、全く寡うございます。」

倉皇入来れる内儀は思いも懸けず富山を見て、

「おや、此方にお在あそばしたのでございますか。」

彼は先の程より台所に詰切りて、中入の食物の指図などして居たるなりき。

「酷く負けて逃げて来ました。」

「それは好く逃げて被入しました。」

例の歪める口を窄めて内儀は空々しく笑いが、忽ち彼の羽織の紐の偏断れたるを見えめて、環の失せたりと知るより、慌て驚きて起たんとせり、如何にとなれば其環は純金製のものなればなり。富山は事も無げに、

「何為、宜い。」

「宜いではございません。純金では大変でございます。」

「何為、可いと言うのに。」と聞きも訖らで彼は広間の方へ出て行けり。

「時に彼の身分は如何かね。」

「然よう、悪い事は御座いせんが……。」

「が、如何したのさ。」

「が、大した事はございませんです。」

「それは然うだらう。然し凡そ甚麼ものかね。」

「旧は農商務省に勤めて居りましたが、唯今では地所や家作などで暮して居るようでございます。如何か小金も有るような話で、鳴沢隆三と申して、直隣町に居りまするが、極手堅く小体に遣つて居るのでございます。」

「はあ、知れたもんだね。」

我は顔に頤を搔撫すれば、例の金剛石は燦然と光れり。

「それでも可いさ。然し嫁れようか、嗣子じやないかい。」

「然よう、一人娘のように思いました。」

「それじゃ窮るじゃないか。」

「私は悪い事は存じませんから、一つ聞いて見ましようで。」

程無く内儀は環を搜得て帰来にけるが、誰が悪戯とも知らで耳搔の如く引展されたり。主は彼に向いて宮の家の様子を見ねけるに、知れる一遍は語りけれど、娘は猶能く知るらんを、後に招きて聴くべしとて、夫婦は頻に、觴を侑めけり。

富山唯繼の今宵此に來りしは、年賀にあらず、骨牌遊にあらず、娘の多く聚れるを機として、嫁選せんとてなり。彼は一昨年の冬英吉利より帰朝するや否や、八方に手分して嫁を求めけれども、器量望の太甚しければ、二十余件の縁談皆意に称わで、今日が日までも仍其事に齟齬して已まざるなり。当時取急ぎて普請せし芝の新宅は、未だ人の住着かざるに、はや日に黒み、或所は雨に朽ちて、薄暗き一間に留守居の老夫婦の額を鳩めては、寂しげに彼等の昔を語るのみ。

第二章

骨牌の会は十二時に迫りて終りぬ。十時頃より一人起ち、二人起ちて、見る間に人数の三分の一強を失いけれども、猶飽かて残れるものは景氣好く勝負を続けたり。富山の姿を隠したりと知らざる者は、彼敗走して帰りしならんと想えり。宮は会の終まで居たり。彼若疾く還りたらんには、恐く踏留るは三分の一弱に過ぎざりけんを、と我物顔に富山は主と語合えり。

彼に心を寄せし輩は皆彼が夜深の帰途の程を氣遣いて、我顧くは何処までも送らんと、絶か念いに念いけれど、彼等の親切は無用にも、お宮の帰る時一人の男附添いたり。其人は高等中学の制服を着たる二十四五の学生なり。金剛石に垂いでは彼の

挙動の目指れしは、座中に宮と懇意に見えたるは彼一人なりければなり。此の一事の外は人目を牽くべき点も無く、彼は多く語らず、又は喋がず、始終慎しくして居たり。終まで此兩個の同伴なりとは露頭せざりき。然あらんには余所々々しさに過ぎたればなり。彼等の打連れて門を出ずるを見て、始めて失望せしもの寡ならず。宮は鳩羽風の頭巾を被りて、濃淺黄地に白く中形模様ある毛織のショールを絡い、学生は焦茶の外套を着たるが、身を窄めて吹来る風を遣過しつゝ、遅れし宮の迎着くを待ちて言出せり。

「宮さん、那の金剛石の指環を穿めて居た奴は如何だい、可厭に氣取つた奴じゃないか。」

「然うねえ、だけれど衆が彼人を目の敵にして乱暴するので氣の毒だったわ。隣合つて居たもんだから私まで酷い目に遭わされてよ。」

「うむ、彼奴が高慢な顔をしているからさ。実は僕も横腹を二つばかり突いて遣つた。」

「まあ、酷いのね。」

「那云う奴は男の目から見ると反吐が出るようだけれど、女には如何だろうね、那腰のが女の氣に入るのじゃないか。」

「私は可厭だわ。」

「芬々と香水の匂がして、金剛石の金の指環を穿めて、殿様然たる服装をして、好いに違無いきさ。」

学生は嘲むが如く笑えり。

「私は可厭よ。」

「可厭なものが組になるものか。」

「組は關だから為方が無いわ。」

「圖だけれど、組に成つて可厭そうな様子も見えなかったもの。」

「那樣無理な事を言つて！」

「三百円の金剛石じゃ到底僕等の及ぶ所にあらずだ。」

「知らない！」

宮はショールを揺上げて鼻の半まで掩隠しつ。

「あゝ寒い！」

男は肩を峙て、直と彼に寄添えり。宮は猶黙して歩めり。

「あゝ寒い!!」

宮は仍答えず。

「あゝ寒い!!!」

彼は此時始めて男の方を見向きて、

「如何したの。」

「あゝ寒い。」

「あら可厭ね、如何したの。」

「寒くて耐らんから其中へ一処に入れ給え。」

「何の中へ。」

「ショールの中へ。」

「可笑い、可厭だわ。」

男は逸早く彼の押えしショールの片端を奪いて、其中に身を容れたり。宮は歩み得ぬまでに笑いて、

「あら貰いさん、是じや切なくて歩けやしない。あゝ、前面から人が来てよ。」

恠る戯を作して憚らず、女も為すまゝに信せて咎めざる彼等の関繋は抑も如何。事情ありて十年来、鴨沢に寄寓せる此の間貫一は、今年の夏大学に入るを待ちて、宮が妻せらるべき人な

り。

第三章

間貫一の十年來鴨沢の家に寄寓せるは、怙る所無くて養わるるなり。母は彼の幼かりし頃世を去りて、父は彼の尋常中学を卒業するを見るに及ばずして病死せしより、彼は哀嘆の中に父を葬ると与に、己が前途の望をさえ葬らざる可からざる不幸に遭へり。父在りし日さえ月謝の支出の血を絞るばかりに苦しき瘦世帯なりけるを、当時彼尚十五歳ながら間の戸主は学ぶに先ちて食うべき急に迫られぬ。幼き戸主の学ぶに先ちては食うべきの急、食うべきに先ちては葬すべき急、猶之に先ちては看護医薬の急ありしにあらずや。自活すべくもあらぬ幼き者の如何にして是等の急を救得しか、固より貫一が力の能うべきにあらず、鴨沢隆三の身一個に引受けて万端の世話せしに因るなり。孤児の父は隆三の恩人にて、彼は聊か其旧徳に報ゆるが為に、啻に其病めりし時に扶助せしのみならず、常に心着けては貫一の月謝をさえ間支弁したり。恠くて貧き父を亡いし孤児は富める後見を得て鴨沢の家に引取られぬ。隆三は恩人に報ゆるに其短き生時を以て懐かず思ひければ、左右は其忘形見を天晴人と成して、彼の一日も忘れざりし志を継がんとせるなり。

亡き人常に言ひけるは、苟くも侍の家に生れながら、何の面目ありて我子貫一をも人に侮らすべきや。彼は学士となして、願くば再び四民の上に立たしめん。貫一は不斷に此言を以て誓められ、隆三は会う毎に亦此言を以て啣たれしなり。彼は言う邊だに無くて暴に歿りけれども、其の常に口にせし所は明かに彼の遺言なるべきのみ。

然れば貫一が囁沢の家に於ける境遇は、決して厄介者として陰に疎まるゝ如き憂目に遭ふにはあらざりき。慰い継子などに生れたらんよりは、恠て在りなんこそ幾許か幸は多からんよ、と知る人は噂し合えり。隆三夫婦は実に彼を恩人の忘形見として疎ならず取扱いいけるなり。然ばかり彼の愛せらるゝを見て、彼等は貫一をば娘の婿にせんとすならんと想える者もありしかど、当時彼等は構えて然る心ありしにはあらざりけるも、彼の篤学なるを見るに及びて、漸く其心は出て来て、彼的高等中学校に入りし時、彼等の了簡は始めて定りぬ。

貫一は篤学のみならず、性質も直に、行も正しかりければ、此人物を以てて学士の冠を戴かんには、誠に獲易からざる婿なるべし、と夫婦は私に喜びたり。此身代を譲られたりとして、他姓を冒して得謂われぬ屈辱を忍ばんは、彼の屑しと為ざる所なれども、美しき宮を妻に為るを得ば、此身代も屈辱も何か有らんと、彼はなか／＼夫婦に増したる權を懷きて、益々學問を励みたり。宮も貫一をば憎からず思えり。然れど恐くは貫一の思える半には過ぎざらん。彼は自ら其の色好を知ればなり。

世間の女の誰か自ら其の色好を知らざるべき、憂うる所は自ら知るに過るに在り。謂う可くんば、宮は己が美しさの幾何値するかを当然に知るなり。彼の美しさを以てして纔に簡程の資産を嗣ぎ、類多き学士風情を夫に有たんは、決して彼が所望の絶頂にはあらざりき。彼は貴人の奥方の微賤より出でし例寡からざるを見たり。又は富人の醜き妻を厭いて、美しき妾に親むを見たり。才だにあらば男立身は思のまゝなる如く、女は色をもて富貴を得べしと信じたり。尚彼は色を以て富貴を得たる人たちの若干を見たりしに、其容の己に如かざるものゝ多きを

見出せり。剩え彼は行く所に其美しさを唱われざるはあらざりき。尚一件最も彼の意を強うせし事あり。そは彼が十七の歳に起りし事なり。当時彼は明治音楽院に通いたりしに、ワイオリンのプロフェッサーなる独逸人は彼の愛らしき袂に艶書を投入れぬ。是素より仇なる恋にはあらで、女夫の契を望みしなり。殆ど同時に、院長の某は年四十を踰えたるに、先年其妻を喪いしをもて再び彼を娶らんとて、密に一室に招きて切なる心を打明かせし事あり。

此時彼の小き胸は破れんとするばかり轟けり。半は曾て覺えざる可差の為に、半は遽に大なる希望の宿りたるが為に。彼は茲に始めて己の美しさの寡くとも奏任以上の地位ある名流を其夫に直いすべきを信じたるなり。彼を美しと見たるは彼の教師と院長とのみならず、牆を隣れる男子部の諸生の常に彼を見んとて打騒ぐをも、宮は知らざりしにあらざり。

若彼のプロフェッサーに添わんか、或は四十の院長に従わんか、彼の榮譽ある地位は、学士を婿にして囁沢の後を嗣ぐの比にあらざらんをと、一旦抱ける希望は年と共に太りて、彼は始終昼ながら夢みつゝ、今にも貴き人又は富める人又は名ある人の己を見出して、玉の輿を昇せて迎に來るべき天縁の、必ず廻到らんことを信じて疑わざりき。彼の然までに深く貫一を思わざりしは全く之が為のみ。然れども決して彼を嫌えるにはあらざり、彼と添わば有繋に樂しからんとは念えるなり。如此く決定に其とは無けれど又有りとし見ゆる簪木の好運を望みつゝも、彼は怠らず貫一を愛して居たり。貫一は彼の己を愛する外には其の胸の中に何もあらじとのみ思えるなりけり。

第四章

漆の如き闇の中に貫一の書斎の枕時計は十時を打ちぬ。彼は午後四時より向島の八百松に新年会ありとて未だ還らざるなり。

宮は奥より手ランプを持ちて入来にけるが、机の上なる書燈を点し了れる時、婢は台十能に火を盛りたるを持来れり。宮は之を火鉢に移して、
「而して奥のお鉄瓶も持つて来ておくれ。あゝ、もう彼方は御寝になるのだから。」

久しく人氣の絶えたりし一間の寒は、今我に人の温き肉を得たるを喜びて、直ちに咬まんとするが如く膚に薄れり。宮は慌忙しく火鉢に取附きつゝ、目を挙げて書棚に飾れる時計を見た

夜の闇く静なるに、燈の光の独り美しき顔を照したる、限無く艶なり。松の内とて彼は常より着飾れるに、化粧をさえたれば、露を帯びたる花の梢に月のうつろえるが如く、背後の壁に映れる黒き影さえ香滴るゝようなり。

金剛石と光を争ひし目は惜気も無く燈りて時計の秒を刻むを打目成れり。火に翳せる彼の手を見よ、玉の如くなり。然らば友禪模様ある紫縮緬の半襟に頼まれたる彼の胸を想え。其の胸の中に彼は今如何なる事を思えるかを想え。彼は憎からぬ人の帰来を待侘ぶるなりけり。

一時又寒の太甚しきを覚えて、彼は時計より目を放つと与に起ちて、火鉢の対面なる貫一が裾の上に座を移せり。箇は彼の手に縫いしを貫一の常に敷くなり、貫一の敷くをば今夜彼の敷

くなり。

若しやと聞着けし車の音は漸く近づきて、益々轟きて、竟に我門に停りぬ。宮は疑無しと思ひて起たんとする時、客はいと酔いたる声して物言えり。貫一は生下戸なれば嘗て酔いて帰るし事あらざれば、宮は力無く又坐りつ。時計を見れば早や十一時に垂んとす。

門の戸引啓けて、酔いたる足音の土間に踏入りたるに、宮は何事とも分かず唯慌てゝランプを持ちて出でぬ。台所より婢も、出合えり。

足の踏所も覚束無げに酔いて、帽は落ちなんばかりに打傾き、ハンカチーフに裹みたる折を左に翳げて、山車人形のように揺々と立てるは貫一なり。面は今にも破れぬべく紅に熱して、舌の乾くに堪えかねて連に空唾を吐きつゝ、

「遅かったかね。さあ御土産です。還つて之を細君に遺る。何ぞ仁なるや。」

「まあ、大変酔つて！ 如何したの。」

「酔つて了つた。」

「あら、貫一さん、這處所に寝ちゃ困るわ。さあ、早くお上りなさいよ。」

「恁う見えても靴が脱げない。あゝ酔つた。」

仰様に倒れたる貫一の脚を擁抱きて、宮は辛くも其靴を取去りぬ。

「起きる、あゝ、今起きる。さあ、起きた。起きたけれど、手を牽いてくれなければ僕には歩けませんよ。」

宮は婢に燈を把らせ、自らは貫一の手を牽かんとせしに、彼は跟きつゝ肩に縋りて遂に放さざりければ、宮は其の身一つさ